

まちやむら、そこに住む人びと(=ざいち)の、
知恵や生き方(=ち)から学び、実践する活動です。

ざいちのち

No. 11 2009. 09.

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

高島市 棕川

朽木フィールドステーション

焼畑に寄せるそれぞれの思い

朽木 FS 研究員 増田和也

8月20日、余呉で焼畑の火入れをおこないました。本ニュースレターでご案内してきましたように、これまで菅並(すがなみ)集落で焼畑の準備を進めてきましたが、事情により菅並での火入れは延期することになりました。その代わりに、地元協力者である永井邦太郎さんが菅並と同時並行で準備を進めていた別の場所に火を入れることになりました。

代替地は、菅並の西に位置する中之郷(なかのこう)と下丹生(しもにゅう)の2集落の境である赤子山の北斜面です。ここは、レクリエーション施設「ウッディーパル余呉」内のスキー場で、今の季節には広大な草地が広がっています。施設の支配人によると、近年の暖冬でめっきりと降雪量は減っており、無雪期のスキー場活用が課題であるとのこと。そこで、新たな試みとして、永井さんの指導のもと焼畑に取り組むことになった次第です。

当日は、地元やウッディーパル余呉から15名ほど、大学関係から11名が参加しました。地元参加者のなかには、かつて高時(たかとき)川上流部の集落に暮らし、1996年まで焼畑に携わってきた方もおられました。この方は、丹生ダム(高時川ダム)の建設工事により川下の集落に移転されたものの、今



写真1: 赤子山の草地。この一部で火入れをおこないました。

回の火入れに集まってくださいました。

午前9時頃にまず上方部の耕地に点火。私は遅れて到着したので作業の流れを詳しく把握していませんが、他の方によると、斜面上部部、風下から火を入れたとのこと。これは火が一気に廻らないようにし、火勢をコントロールするとともに、地面をゆっくりと焼くためです。これにより地面を消毒する効果があると永井さんは話します。火入れの最中はものすごい熱と煙で、汗と涙のために全身びしょりとなりました。とはいえ、火を入れても、火はなかなか均一には廻らず、太目の枝は焼け残っています。火勢が落ち着くと、こうした燃え残りを焼畑内の数カ所に集めて、ふたたび燃やしていきます。これをコズ焼きといいます。

火が落ち着くと、いよいよ播種です。今回は山カブラに加え、ダイコンを撒きました。これは、焼畑と常畑で育った作物の味のちがいを比べるにはカブラよりも馴染みのあるダイコンの方がよいだろうという、朽木FSからの提案によります。かたわらでは土壌学を専門とするグループが火入れの効果を調べるべく、火入れをした場所/していない場所の土壌をそれぞれ採集していました。このように、焼畑の取り組みにはさまざまな方々がそれぞれの思いや目的をもって集まっています。



写真2: 火入れ。横一列に並んで、斜面上部から徐々に火を入れていきます。(撮影:鈴木玲治)

亀岡フィールドステーション

保津川筏聞き取りノート③ 一筏の構造②

亀岡 FS 研究員 河原林 洋

今回は、筏の連のつなぎ方とカジボウの取り付け方を見ていく。(図1、図2参照)

①1連目「ハナ」と2連目「ワキ」をつなぐ

つなぎ目の中央部のみを2本の藤蔓でくぐる。図2で見られるように、1本目はハナ EF、ワキ cde を基準に赤三角で示す部分のコウガイと材木の隙間に藤蔓を通し、輪を描くようにくぐる。2本目は FG、efg を基準に青三角で示す部分を同様にくぐる。このように中央部だけをくぐるのは、のちに「カジボウ」をハナに取り付けた際、カジボウを動かすことで、ハナが上下左右に動き、舵を切ることを可能にするためである。

②「ワキ」と3連目「ソウ」をつなぐ

この場合は①とは違ってあまり左右に動かないように中央部と両端を3本の蔓でくぐり、連と連とをある程度固定する。図2の緑三角で示すように、中央部は F と def を基準にくぐり、両端は BC と b、IJ と h を基準にくぐる。

③「カジボウ=Ⅲ」の取り付け

「ハナ」に取り付ける「カジボウ」は「1番矢」とも呼ばれ、筏の操舵において重要な装備であり、しっかりと固定することが肝要である。「ハナ」中央部にかましてある I と II の材木の間に細めの材木=Ⅲを差し込み、下部に取り付け台となる細めの短い木を置く。ハナ中央部で I II Ⅲをたすき掛けするようにくぐり、Ⅲと取り付け台を EF、FG を基準に2本の蔓でくぐる。上から見ると X の字を書くようにくぐる。Ⅲのカジボウは横から見るとハナからワキへ角が出ているように見える。カジボウの後部の高さは膝より少し高い位置で固定する。舵を持つ者はワキに腰を落として立って操舵する。

④「カジボウ=Ⅳ」の取り付け

「ワキ」と「ソウ」にまたがって取り付け「カジボウ」は「2番矢」とも呼ばれ、1番矢の補助的役目を担う。ワキ中央部よりやや右側に2本「カン」を打ちつけ、間に細めの材木を差し込み、カンに蔓

を通してくぐる。1番矢の時よりさらに細めの取り付け台をカジボウの下に据え置き、FG と HI のコウガイと材木の隙間に蔓を通してくぐる。さらにソウにカンを1本打ちつけくりつける。カジボウの高さは足首より少し高めぐらいに留める。これは、手で操舵するのではなく、竿(檜材)の先を連の材木の隙間にあてがい、カジボウに当てて、こてる(てこの原理で動かす)ように左右に動かすのである。(図3参照)

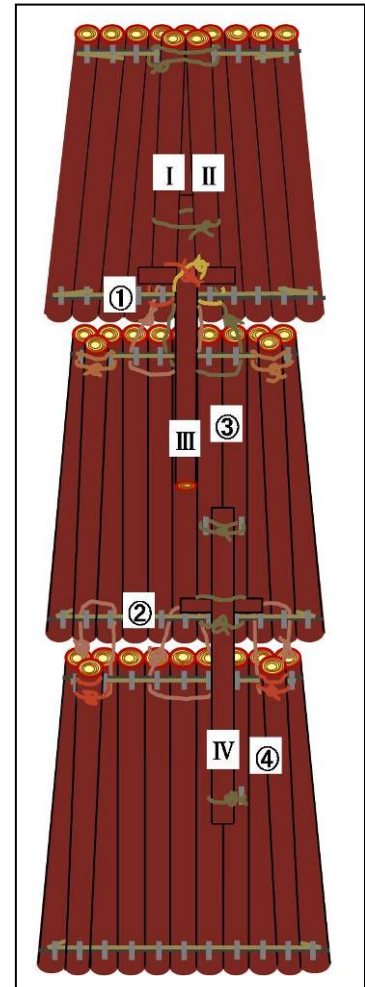


図1: 「ハナ」「ワキ」「ソウ」と「カジボウ」

今回は、筏の全体像とカセギという筏の背骨にあたる部分を紹介する。

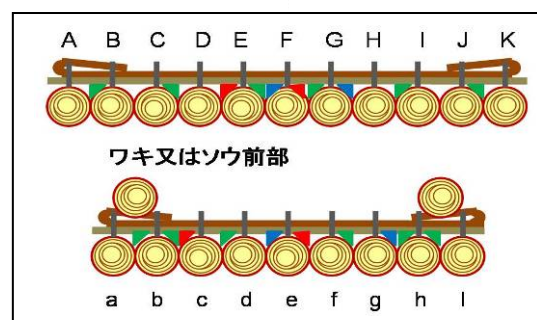


図2: ハナ又はワキ後部

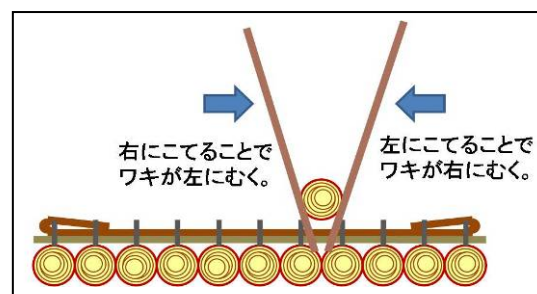


図3: 二番矢の動かし方

守山フィールドステーション

Aさんとの出会い

一在所の方から学ぶ野洲川流域調査一

生存基盤科学研究ユニット 藤井美穂

「わしはこの土地で生まれ育って 80 年や。それで、ここのことがちょっと分かってくるんやな」(A さん 1925 年生 84 歳)。A さんは滋賀県守山市開発(かいほつ)で生まれ育ち、同地域の土地改良組合に関わってきた。A さんに地域を案内していただき、野洲川改修事業、土地改良事業および集落の暮らしについて話をうかがっている。

「わしは体が動くまで、ずっとコメをつくるんや。戦争中の食糧難のことが死ぬまで体にしみついとる」。現在、A さんは、7 反(1 反は 10 アール)の水田と 6 反の畑を耕作している。毎日、早朝から昼過ぎまで畑に行き、スイカ、カボチャ、スイートコーン、ササラゴボウ、トマト、ナスビ、サツマイモをつくってきた。守山市の聴覚障害者助産所の「みみの里」の数人の聴覚障害者の方を農作業のアルバイトとして雇っている。農業の経験がない方もいるため、一から教えなければならないこともあるという。だが、A さんは煩をいとわない。「在所に世話になったもん(者)が恩返しをするのは当たり前のことや」と語る。

現役の百姓である多忙な A さんに会うのは、雨の日か畑に行かない日だけである。朝 6 時、「今日、ええか。こっちは雨降ってんで」と A さんから連絡がある。午前中にお宅にうかがうと、1 日の調査の段取りを教えてください。A さんが運転する軽トラックに乗り、開発集落とその周辺地域の写真を撮るのである。だが、被写体を選ぶのはあくまでも A さんであり、私は写真を撮るだけである。被写体の多くは、A さんの記憶に残る場所である。写真を撮り終わった後、A さんは撮影した場所について話してくれるので、それを記録する。A さんと一緒に彼の友人の家、寺社、石碑、農地、用排水路、旧野洲川堤防跡などを訪れて写真を撮った。すでに A さんと

撮影した写真は約 200 枚におよぶ。

撮影した後、A さんは私に必ず質問する。例えば、川の小型堰を撮影した後、かつて堰があった場所から現在の位置に移された理由を問われた。すぐに回答を与えてくれないのだ。「あんた、なんも分かってないな」というのが私に対する A さんの口癖だ。

こうした写真撮影は、2 回目の調査の時、開発集落にある己爾乃(こじの)神社の若宮とそれを囲んでいる低い丸石の石垣を撮るように A さんに言われたことから始まった。この若宮は太平洋戦争で戦死した在所の方を祀っており、彼の兄も戦死し、祀られていると話してくれた。1955 年、若宮が建てられた時に遺族会の人たちが、戦死した人に思いを馳せて川から石を一つずつ拾い、数か月にわたって積み上げたという。私の研究テーマとは全く関係がないどこにでもある石垣には、A さんや在所の人たちの大切な思いがこめられていたのだ。研究者が調査資料にならないと思うものが、当該地の人々にとって重要な意味があるという自明なことを、A さんに手伝っていただいて写真を撮るたびに具体的に突き付けられている。

雨が降るなか水田の用排水路を一つずつ歩き写真を撮り終わった。「あんた、こういう地道なことは目だたへん。そやけど長持ちするんや。わしの経験からやけどな」。調査のたびに、A さんから心に響く言葉をいただいている。



写真 1 : 開発の用水路を案内して下さった A さん
(2009 年 7 月 26 日撮影)

催しのご案内

■第15回 定例研究会

1. 日時：平成21年9月25日（金）17:30～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者：増田和也（朽木FS 研究員）

京都大学総合博物館・学術映像博 2009 企画展示 「水・土・火と生きる風景：在地の昔と今をつなぐ」 のご案内

京都大学東南アジア研究所が担当する生存基盤科学研究ユニットの「京滋フィールドステーション事業」では、京都大学総合博物館で開催中の「学術映像博2009」において、「水・土・火と生きる風景：在地の昔と今をつなぐ」と題した企画展示を行っています。展示期間は9/16(水)～10/25(日)で、3つのフィールドステーション（亀岡FS、守山FS、朽木FS）での取り組みをパネルや映像、模型展示などを通じて紹介しています。

守山FSでは、エリ漁に用いる網や魚の模型を展示しながら、琵琶湖のエリ漁を紹介しています。エリ漁から見えてくる琵琶湖の現状、琵琶湖漁師の生き方や知恵を実感してもらえらると思います。亀岡FSでは、筏士の諸役を免除した豊臣秀吉の朱印状や筏の絵図などを展示し、保津川の筏流しの歴史や文化を紹介しています。また、筏流し復活へ向けた現在の取り組みを通して、流域の人、山、川、町のつながりが再構築されていく様子をパネルや映像で紹介しています。朽木FSでは、野山への火入れが作り出してきた草山の景観の変遷を、古地図や空中写真を用いて紹介しています。かつての暮らしに不可欠だった茅や柴を採集するための火入れが、社会変化のなかで次第に失われ、草山が木山へと変わってきた様子がわかります。

また、これらの企画展示のプレイベントとして、9/12(土)には筏組みのワークショップを行いました。このワークショップでは、9/9(水)に保津峡・落合から嵐山へ筏を組んで流した木材の一部を京大博物館に運び、亀岡FSの河原林研究員の指導の下、参加者全員で筏に組み直しました。この筏は、京大博物館の1Fホールに展示してあります。また、筏の横には、保津川の流れをイメージしたタケのオブジェ（草月流



4. 発表内容

『火のエネルギーによる「くらしの森」づくり 一進捗報告と今後の展望-』

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室(担当:鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

奈良県支部制作、亀岡のマダケを使用)が展示してあります。ヒノキの丸太をフジヅルで括った野性味あふれる筏と、洗練されたタケのアートの絶妙なコラボレーションを、是非一度ご覧ください。

また、9/30(水)～10/4(日)には、特集期間として、各FSの活動を紹介する以下の映像作品を、博物館2Fの上映スペースにて上映する予定です。

「琵琶湖に生きる風景」(守山FS、制作:武藤恭子・嶋田奈穂子、7分)

「保津川筏復活プロジェクト」(亀岡FS、制作:保津川筏復活プロジェクト連絡協議会、16分10秒)

「焼畑プロジェクト余呉:火入れ」(朽木FS、制作:井上一、7分15秒)

また、特集期間後半の10/3(土)～10/4(日)には、以下の2つのトークイベントを企画しています。

「琵琶湖に生きる」

1. 日時:10/3(土) 15:00～16:30
2. 場所:京都大学総合博物館 2F
3. 内容:琵琶湖漁師の戸田氏をお招きし、琵琶湖の環境と魚からのメッセージを語っていただきます。「琵琶湖を守り、監視してきてくれたのは、魚である。命を張っている魚に比べたら、人間はまだまだ甘い」(戸田直弘「わたし琵琶湖の漁師です」より)。

「筏がつなぐ「ひと」、「もの」、「ちいき」」

1. 日時:10/4(日) 10:30～12:00
2. 場所:京都大学総合博物館 2F
3. 内容:亀岡市文化資料館の黒川館長、元筏士の上田氏、酒井氏、鍛冶職人の片井氏をお招きし、保津川の筏復活の活動を通して、これからの「ひと」、「もの」、「ちいき」のつながりを、筏復活に関わる関係者と共に語り合います。

これらの展示、映像、トークイベントを通じ、在地の技や知恵を体感していただくとともに、これからの暮らしについて、一緒に考えていただければ幸いです。みなさんのご来場をお待ちしております。